

福岡市埋蔵文化財調査報告書第589集

蒲田部木原遺跡群 6

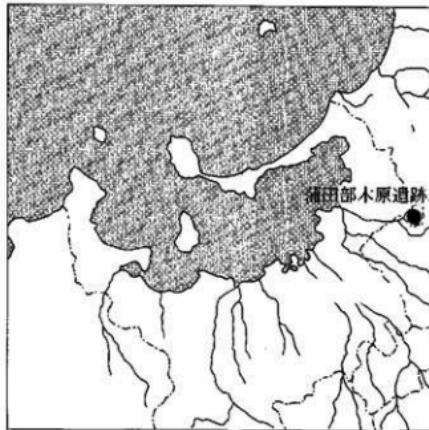
—蒲田部木原遺跡群第6次調査報告—

1999

福岡市教育委員会

KAMATA HE KI BARU
蒲田部木原遺跡群 6

—蒲田部木原遺跡群第6次調査報告—



遺跡略号 KIH-6
遺跡調査番号 9732

1999

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では各種の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

本報告による蒲田部木原遺跡群6次調査では、多くの貴重な成果をあげることが出来ました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで費用負担など多くのご協力を賜りました北部輸送株式会社をはじめとして、関係各位に対し心から謝意を表します。

平成11年2月10日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 優

例　　言

1. 本書は東区蒲田4丁目376番地における物流センター建設に伴い、福岡市教育委員会が平成9年度（1997年度）に実施した蒲田部木原遺跡群第6次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、久保山勝弘が行った。
3. 遺物の実測は長家が行った。
4. 製図は長家、山野妙子が行った。
5. 遺構写真は長家が撮影した。
6. 遺構番号は通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構略号は掘立柱建物（S B）・土坑（S K）・土坑墓／木棺墓（S R）・溝（S D）・ピット（S P）である。
7. 遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
8. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6°21'西偏する。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
10. 本書の執筆・編集は長家があたった。

本文目次

Iはじめに.....	1
1 調査に至る経過.....	1
2 調査体制.....	1
II調査の記録.....	7
1 これまでの調査結果.....	7
2 調査概要.....	8
3 遺構と遺物.....	8
4 小結.....	17

挿図目次

第1図 調査地点位置図(1/25,000)	2
第2図 調査区位置図1(1/4,000)	3
第3図 調査区位置図2(1/2,500)	5
第4図 調査区位置図3(1/1,000)	6
第5図 調査区全体図(1/200)	9
第6図 挖立柱建物実測図(1/60)	11
第7図 溝断面実測図(1/40)	12
第8図 挖立柱建物・溝出土遺物実測図(1/2,1/3)	12
第9図 SK001・004・005 実測図(1/20)	14
第10図 SK001・004・005 出土遺物実測図(1/2,1/3)	15
第11図 SK008・010 実測図(1/20)	16
第12図 その他の遺物実測図(1/3)	17

写真目次

写真1 調査風景	
写真2 調査区全景(東から)	
写真3 調査区全景(真上から)	
写真4 調査区東半部分(西から)	
写真5 調査区西半部分(真上から)	
写真6 SK001(南から)	
写真7 SK001(東から)	
写真8 SK004(東から)	
写真9 SK004(南から)	
写真10 SK005(東から)	
写真11 SK005(南から)	
写真12 SK008(東から)	
写真13 SK010(西から)	
写真14 SK010・SD011(南から)	
写真15 SD002土層	
写真16 SB007(南から)	
写真17 SB009(南東から)	



写真1 調査風景

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成9年7月11日付けで北部輸送株式会社代表取締役井上清次氏より福岡市教育委員会宛に東区蒲田4丁目376番・449番・450番・451番・452番・453-1番・453-2番・454番の物件（計11,186m²）に関する埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。（事前審査番号9-2-171）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である蒲田部木原遺跡群（分布地図番号2-0003・遺跡略号KHH）に含まれており、これを受けて埋蔵文化財課では平成9年7月17日に対象地内の試掘調査を行った。この結果対象地の東側を中心として、表土下50cmでピット・溝を検出した。埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨を回答し（福市教理2-171号）、その取扱について協議を行った。この結果建物建設部分では遺構の破壊が避けられないため発掘調査を行い記録保存を図ることとした。また南側に予定される駐車場部分については当面遺構の破壊が行わぬため、盛土による保存をおこない発掘調査の対象外とした。以上の協議を受けて委託契約を締結し平成9年に発掘調査、平成10年に資料整理・報告書作成を行うこととした。

発掘調査は平成9年8月6日～平成9年9月22日の期間で行った（調査番号9732）。調査対象地は約1,500m²で、調査面積は1,450m²である。また遺物はコンテナ7箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては、申請者である北部輸送株式会社の皆様にはご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました、ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 北部輸送株式会社

調査主体 教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（前任） 柳田純孝 第2係長 山口謙治

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美

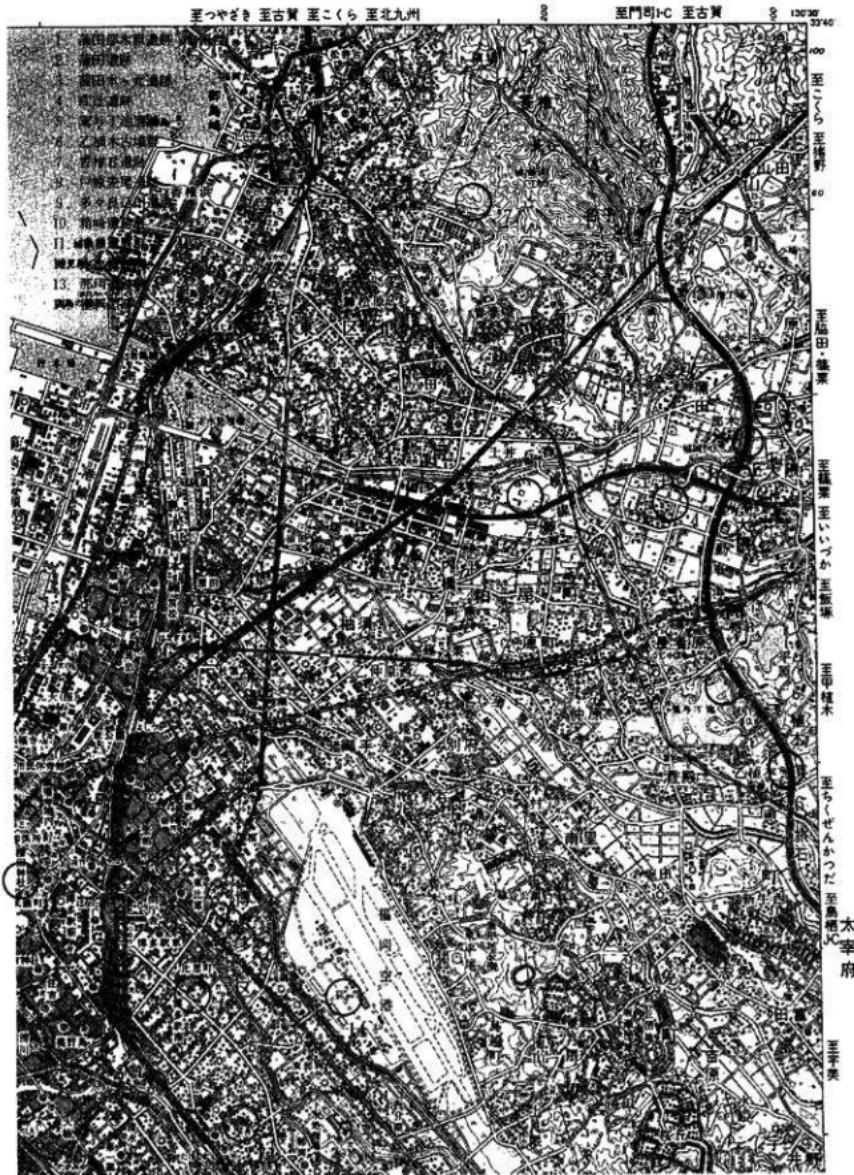
調査担当 第2係 長家伸

調査作業 柳瀬伸 脇田栄 寺園恵美子 小川博 村木義夫 安元尚子 小路丸喜人 平本恵子

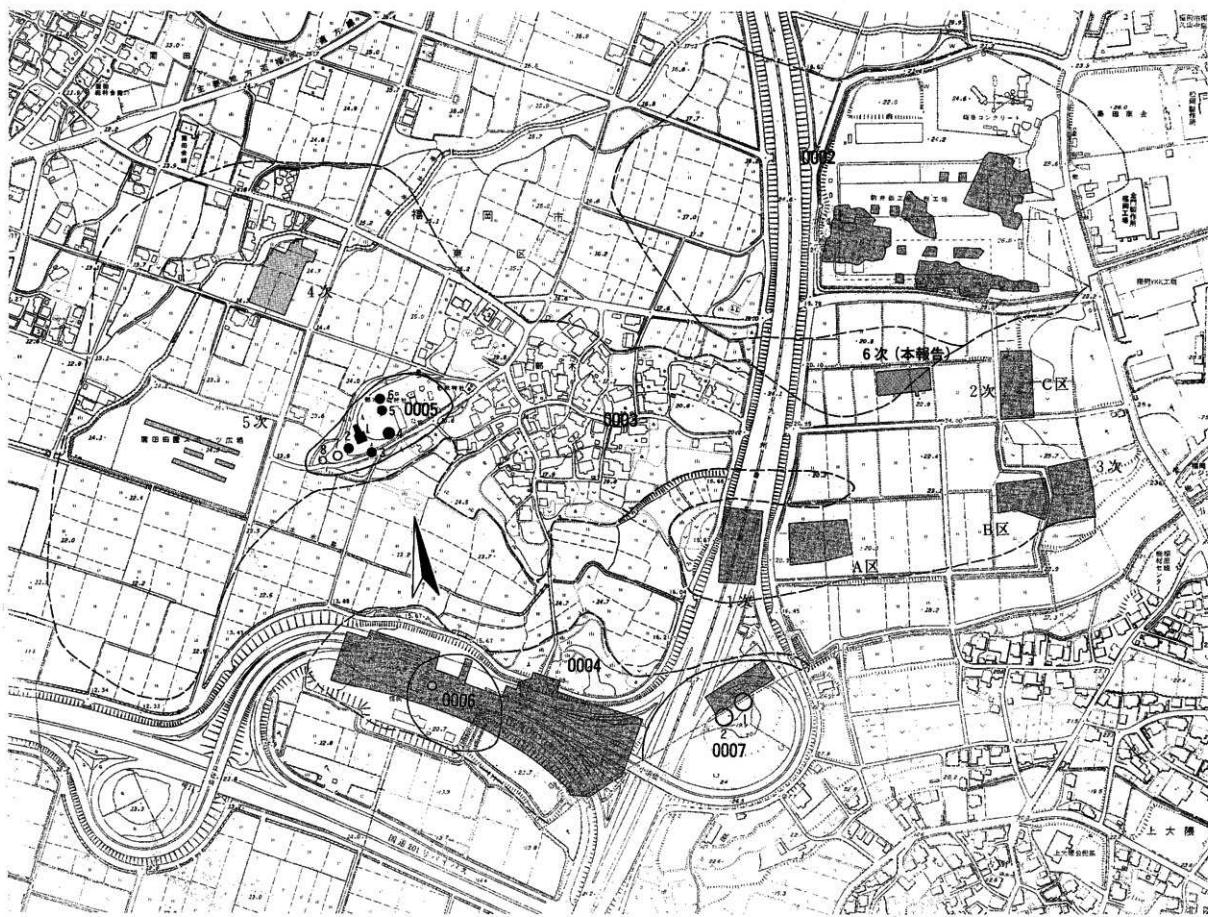
整理作業 水田優子 指原始子 花田則子 池聖子 大音輝子 吉村智子 小池温子 中村幸子
増田ゆかり 草場恵子 高津千尋 小路丸良江 山野妙子 久保山勝弘

蒲田部木原遺跡群第6次調査

遺跡調査番号	9732		遺跡略号	KHH-6	
調査地地籍	東区蒲田4丁目376・449・450・451 452・453-1・453-2・454番		分布地図番号	2-0003	
開発面積	11,186m ²	調査対象面積	1,500m ²	調査面積	1,450m ²
調査期間	平成9年8月6日～平成9年9月22日	事前審査番号		9-2-171	

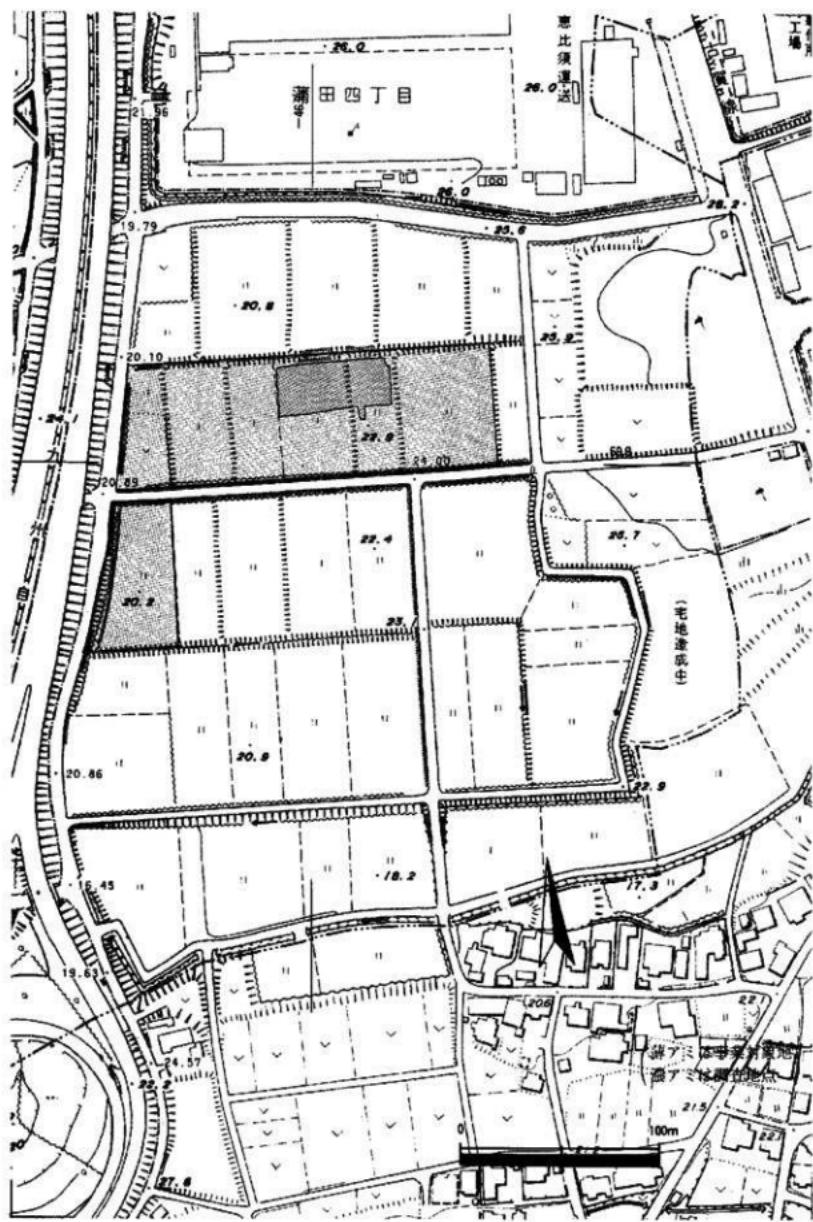


第1図 調査地点位置図 (1/25,000)



第2図 調査区位置図 1 (1/4,000)

- 0002 蒲田水ヶ元遺跡群
- 0003 蒲田部木原遺跡群
- 0004 かけ塚遺跡群
- 0005 郡古墳群
- 0006 かけ塚古墳群 A群
- 0007 かけ塚古墳群 B群



第3図 調査区位置図2 (1/2,500)



第4図 調査区位置図 3 (1/1,000)

II 調査の記録

1. これまでの調査結果

蒲田部木原遺跡及び周辺の遺跡群は福岡市と粕屋町の境界に位置し、久原川と多々良川に挟まれた丘陵及び西側に広がる沖積地に立地する。ここでは現在までに九州縦貫道路関係・倉庫建設・工場建設に伴い発掘調査が行われている。なお立地と環境については既刊の報告書等に詳述されているので今回は割愛したい。

蒲田部木原遺跡群では本報告文を含め6次にわたり発掘調査が行われている。第1次調査は九州縦貫道路建設に伴う調査である。ピット群及び出石器時代の包含層を検出している。

第2次調査は圃場整備事業に伴う調査である。なお今回報告する6次調査地点はこの2次調査が行われた圃場整備対象地内での調査である。2次調査はA～Cの3地区で調査を行っている。A地区では古墳時代後期の堅穴住居跡4棟・土坑・溝、中世の土坑を検出している。B地区では古墳時代前期の堅穴住居跡1棟、古墳時代後期の堅穴住居跡11棟・土坑、古代～中世の土坑を検出する。C地区では古墳時代後期の堅穴住居跡・土坑を検出する。

第3次調査は2次調査B地点の東側に隣接する。弥生時代後期～奈良時代の堅穴住居・掘立柱建物60棟以上、土坑40基を検出している。2次調査と異なり古代～中世に位置づけられる遺構は検出していない。

第4次調査・第5次調査は丘陵の西側低地部分の調査である。第4次調査では弥生時代前期～古墳時代の堅穴住居跡・掘立柱建物・溝・土坑を検出している。特に弥生時代中期後半～古墳時代初頭にかけて、溝で区画された大規模な居住域を形成している。第5次調査は倉庫基礎部分のみの調査で、弥生時代中期～古墳時代の溝・土坑を検出している。またこれらの遺構に混入して縄文中期～晩期前半の遺物が出土している。特に中期～後期の遺物は磨滅がほとんどなく破片の割合大きいものが出土しており、該期の集落の存在が予想される。

また本調査地点と谷を隔てて北側に位置する蒲田水ヶ元遺跡では工場建設に伴い調査が行われ、弥生時代中期～奈良時代の堅穴住居跡・掘立柱建物・環濠・甕棺墓等を検出している。南側の丘陵上に立地する蒲田遺跡群ではインター・チェンジ建設に伴い調査を行っている。検出遺構・遺物は多様で、出石器～縄文時代の包含層、矩形の溝に囲まれた甕棺・土坑墓群、二列埋葬の甕棺・土坑墓群、古墳3基、古墳時代後期の堅穴住居跡、中世の敷石遺構・溝・井戸等を確認している。

参考文献

- 『蒲田部木原遺跡』粕屋町文化財調査報告書第2集 粕屋町教育委員会1985
- 『蒲田部木原3次』福岡市埋蔵文化財調査報告書第446集 福岡市教育委員会1996
- 『蒲田部木原遺跡4次』福岡市埋蔵文化財調査報告書第531集 福岡市教育委員会1997
- 『箱崎遺跡5蒲田部木原遺跡5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第550集 福岡市教育委員会1998
- 『蒲田水ヶ元遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集 福岡市教育委員会1996
- 『蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集 福岡市教育委員会1975

2. 調査概要

前項述べたように本調査地点では既に圃場整備事業に伴い第2次調査が3地区で行われている。今回の申請地はC地区の西側部分にあたり試掘調査の結果申請地北側で遺構が検出されたため発掘調査を行うこととなった。現状は水田で既に圃場整備が行われ土地の切下げが行われているため遺構の残存状態は不良で北側の谷部に近い部分のみで遺構が検出された。調査対象は申請地のうち倉庫の建設される北半のみで駐車場となる南半部分は調査対象から外されているが、遺構の残存状態から申請地内には遺構は残っていないと考えられ、結果的には申請地全体の調査を行ったこととなり、盛土による保存部分は存在しない。

調査は重機による表土除去から行った。耕作土30cm・床土10cm・褐色土10cm～20cmを除去した橙色の風化土上面で遺構を検出した。調査地点は丘陵の西側緩斜面で標高は東端で22.5m、西端で21mを測る。また対象地北側には西側に開口する谷が形成されており、本遺跡と蒲田水ヶ元遺跡を画している。前述の様に遺構の残存状態は不良でピットの深さは10cm～30cmのものが大半である。このため圃場整備での削平を免れた谷に近い部分に集中して遺構を検出した。遺構は掘立柱建物・溝・土坑・木棺墓・ピットを検出している。

3. 遺構と遺物

掘立柱建物 (SB)

SB007 (第6図)

調査区中央部分で検出する。梁行1間3.2m、桁行1間5.4mを測り、主軸方位をN16°-Wにとる。柱穴は埋上はいずれも褐色土で、平面長円形～隅丸方形を呈し深さは90cm程度である。またP1には根がため用に自然礫が投げ込まれており、ここから復元される柱径は約20cmである。柱間長が長く補助柱があったと考えられるが遺構としては残っていない。P2、P3から少量遺物が出土し、弥生時代中期の遺物が出土しているが、建物の時期としては疑問が残る。近接する木棺墓に近い時期ではないだろうか。

出土遺物 (第8図1・2)

1はP2から出土した滑石製の石鉢破片である。重量は20.5gを測る。一面の抉り込みと、紐掛け用の縦溝が残る。2はP3から出土した弥生時代中期に位置づけられる甕の底部破片である。薄手の平底を呈する。胎土には砂粒を多く含み、淡橙色を呈する。

SB009 (第6図)

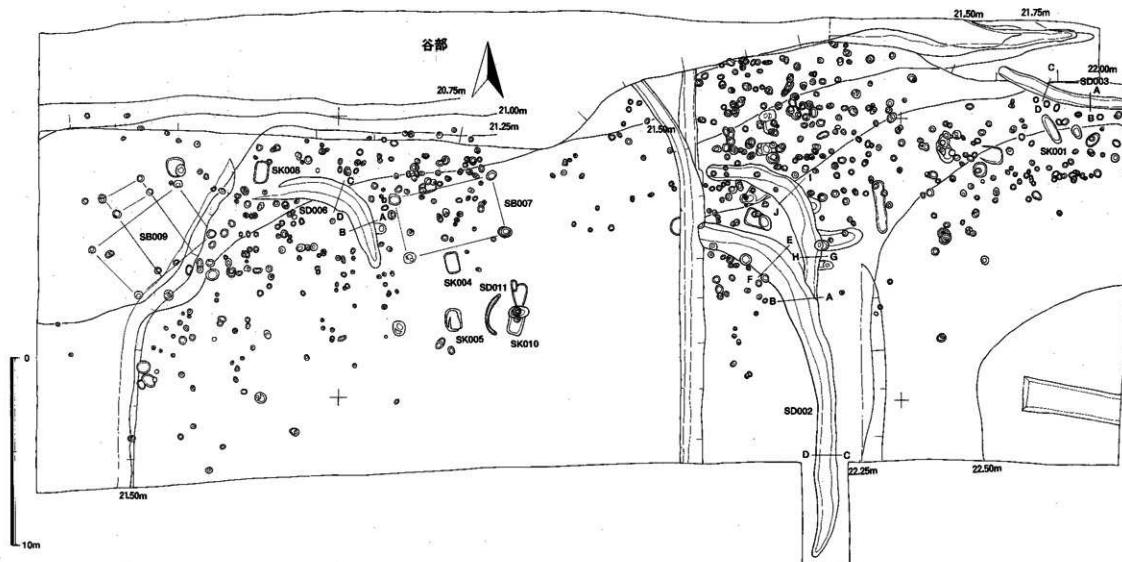
調査区南端で検出する。建物本体部分はP1～P4で構成され梁行1間3.5m、桁行1間5.4m・5.7mを測り、主軸方位をN39°-Wにとる。南西側桁行中央部分にP5～P8により1m×2.3mの張り出しを有している。柱穴は埋土はいずれも締めのない灰褐色土で、平面は径30cm～40cmの円形を呈す。深さは建物本体部分が50cm～80cm、張り出し部分が20cm～30cmと浅くなっている。SB007同様に柱間長が長く補助柱があったと考えられるが遺構としては残っていない。また柱痕跡は確認できなかった。遺物は図示不可能な土器小破片が1点出土するのみである。主軸方位が異なるが建物サイズの類似性からSB007に近い時期と考えられるが不明な点が多い。

溝 (SD)

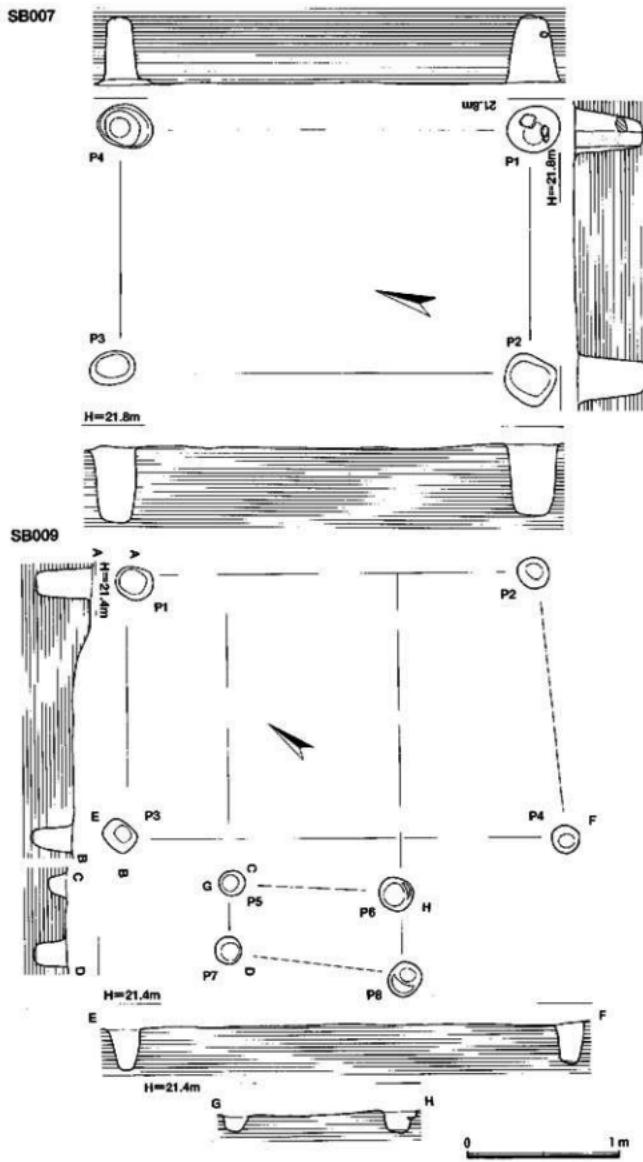
溝は3条検出している。この内SD002とSD006は一部分のみの検出であるが、瓶形に巡る区画を意識した溝と考えられる。しかし削平により区画内に想定される建物等は不明である。

SD002 (第7図)

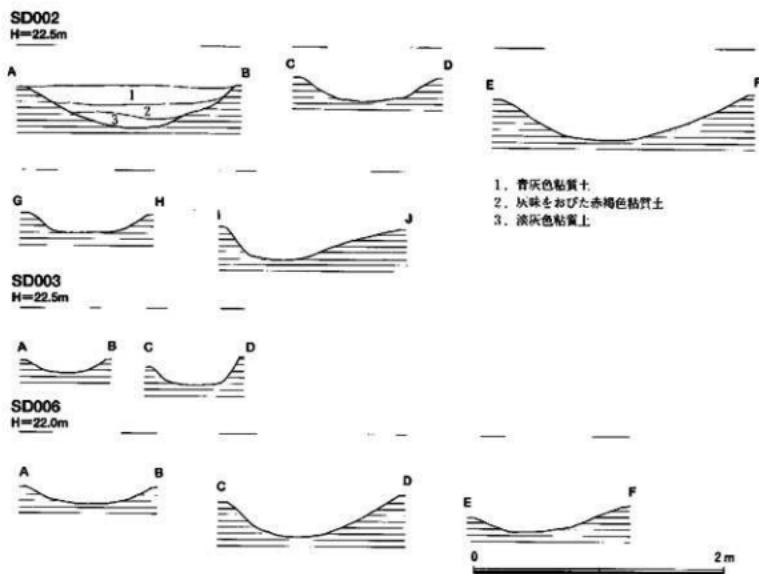
調査区北側で確認する。矩形に巡る溝の北東コーナー部分から南側を検出している。断面は浅皿



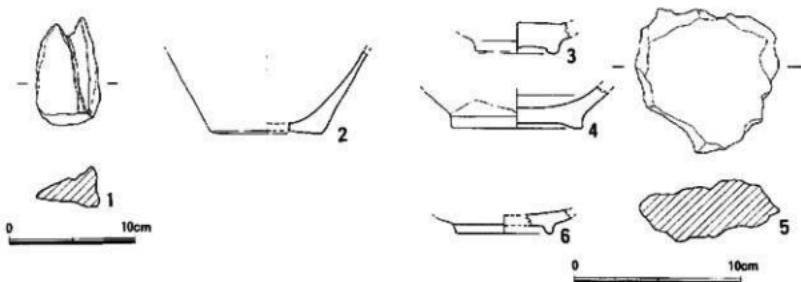
第5図 調査区全体図 (1/200)



第6図 据立柱建物実測図 (1/60)



第7図 溝断面実測図 (1/40)



第8図 挖立柱建物・溝出土遺物実測図 (1は1/2、その他は1/3)

状を早し、溝幅80cm～1.5m・深さ15cm～35cm程度を測る。北辺部分は2条に分岐しているが、土層観察では切り合い関係は認められない。掘り直しの可能性も捨てきれないが、同時期に併存したものと考えられる。この際溝により区画された部分の幅は3mとなる。また南端は削半により緩やかに立ち上がっているが、痕跡的にコーナー部分にあたる様であり、これによれば南北方向の区画内法は20m強となる。出土遺物には土師器小破片、青磁破片、滑石製石鍋破片、楕形鍛冶鋤がある。12世

紀後半から13世紀に位置づけられる。

出土遺物（第8図3～5）

3は龍泉窯系青磁碗の底部である。高台型付きから底面が露胎となる。釉調は明緑色を呈する。4は白磁碗IV類の底部破片である。5は一部を欠損するが略完存する楕円形鐵冶滓である。重量400gを測る。上面は平滑で底面には細かな凹凸がある。破面からは2mm～7mmの気孔が多く観察できる。

SD003（第7図）

調査区北東隅で検出する。谷部に向かって落ち込み自然消滅する溝である。断面浅皿状を呈し、幅70cm・深さ10cm～20cmを測る。埋土は暗褐色土である。瓦器碗底部破片1点が出土するのみである。

出土遺物（第8図6）

6は瓦器碗の底部破片である。磨滅が進み調整等は観察できない。

SD006（第7図）

調査区西側で検出する。溝の北東コーナー部分のみが確認されている。コーナーは弧を描きほぼ90°に方向を変えており、溝の旧状は矩形に巡るものと想定される。溝幅1.2m・深さ25cm程度を測る。埋土は暗褐色土である。方向としてはSD002にほぼ平行するものであり、時期的にも近接することから何らかの有機的な関係も考えられる。出土遺物は須恵器、陶器小破片が数点出土するのみである。

土坑・土坑墓・木棺墓（SK）

機能的に異なるため本来は分別して報告を行うべきであるが、遺構の形態により埋葬遺構と生活遺構の区別がつかないもの、埋葬遺構においても木棺の存否が不明瞭なものがありここでまとめて報告する。

SK001（第9図）

調査区北東端で検出する。平面隅丸長方形を呈し、長軸方位をN-36°-Wにとる。長軸1.8m・短軸60cm・深さ20cmを測り、埋土は青灰色粘質土である。北側に土師器皿が1枚据えられており土坑墓と考えられる。

出土遺物（第10図7）

7は図示された土師皿である。復元口径9.6cm、器高1.1cmを測る。磨滅が進み調整は不明である。

SK004（第9図）

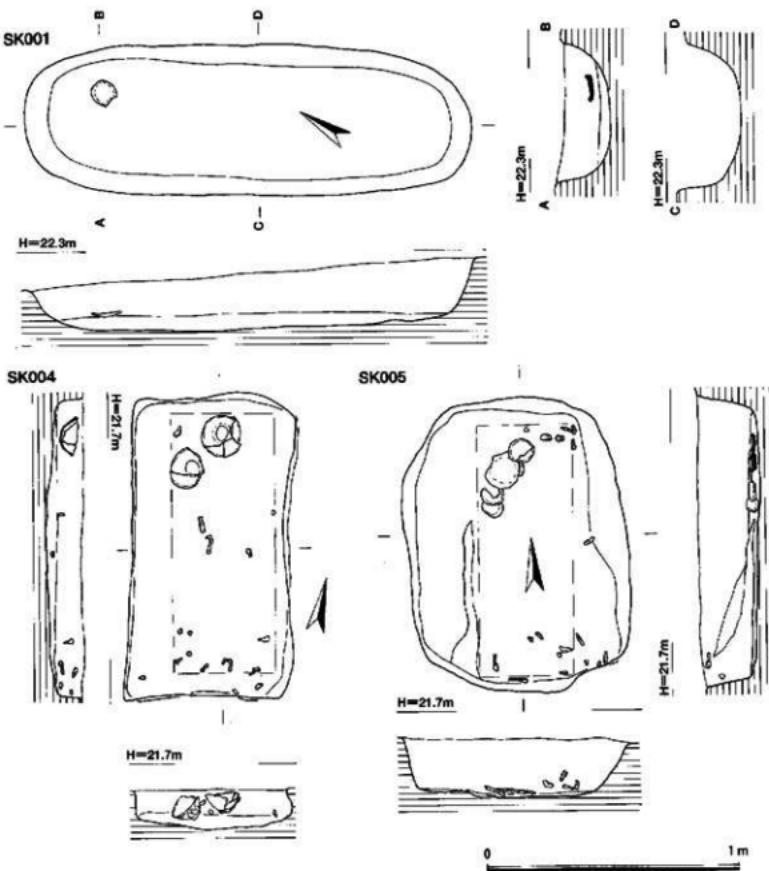
調査区中央部、SB007の南側で検出する。平面長方形を呈し、長軸方位をN-12°-Wにとる。長軸1.2m・短軸0.6m・深さ15cmを測り、埋土は暗褐色土である。鉄釘が出土しており木棺墓と考えられる。釘の出土状況から木棺の推定サイズは1.05m×0.4mに復元できる。北側に青磁碗2個体が据えられており、この部分が頭位置にあたると考えられる。

出土遺物（第10図8～21）

8・9は刷毛された龍泉窯系青磁碗である。外面は鏽蘿弁文を刻み、内面は無文である。釉調は淡い緑色で、高台型付きから外底面が露胎となる。10～21は棺材固定の鉄釘である。頭部は敲打用にL字上に折れ曲がっている。また先端が釣り針状に曲がりJ字形を呈するもの（19・20）や先端が小さくL字状に曲がるもの（21）などがある。

SK005（第9図）

調査区中央部、SK004の南側で検出する。平面はややいびつな長方形を呈し、長軸方位をN-2°-Eにとる。長軸1.2m・短軸0.9m・深さ25cmを測り、埋土は赤褐色土と暗褐色土の混合土である。SK004と同様に鉄釘が出土しており木棺墓と考えられる。釘の出土状況及び掘り方底面の段差から木棺の推定サイズは1m×0.4mに復元でき、SK004とは同じとなる。北側に土師器皿・小皿を5



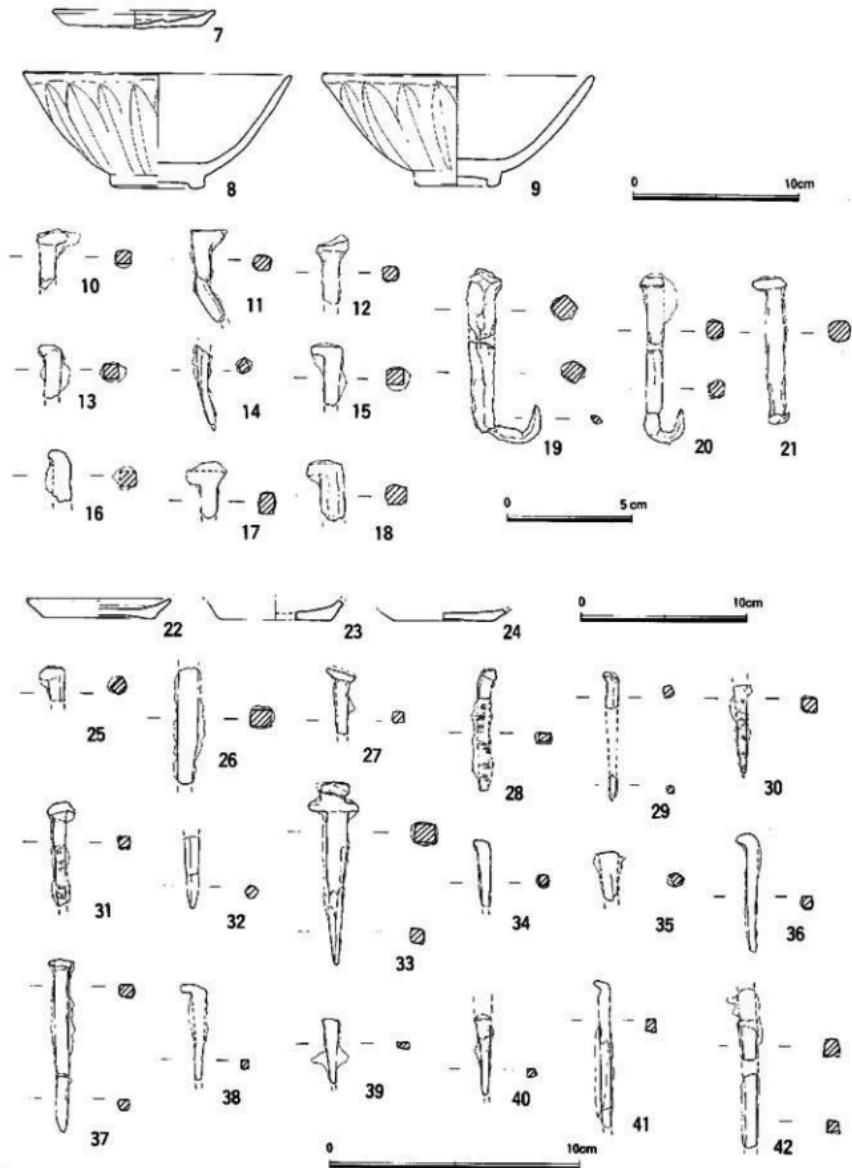
第9図 SK001・004・005 実測図 (1/20)

個体やや弧を描くように据えており、この部分が頭位置にあたると考えられる。また土師器のうち北側3枚が正置、南側2枚が倒置されている。

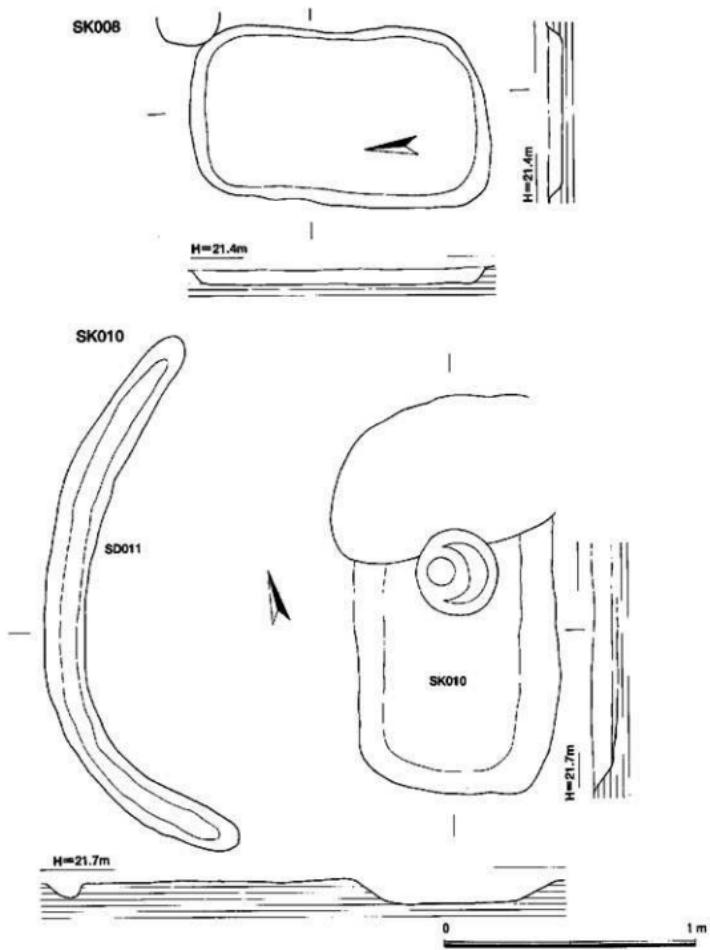
出土遺物（第10図22～42）

22～24は副葬された土師皿である。出土時は完存していたが非常に脆く、取り上げ時に2枚はばらばらとなってしまい、固化できなかった。口径は8cm～8.5cm程度である。磨拭が進み調整は不明である。25～42は棺材固定の鉄釘である。頭部はL字状に折れ曲がる。SK004出土の釘に比べ比較的の残存状態は良く、頭により梢の木質が釘表面に固定されているものが多い。また身部は直線的で先端が折れ曲がるものがない。

SK008（第11図）



第10図 SK001・004・005 出土遺物実測図 (10~18と25~42は1/2、その他は1/3)

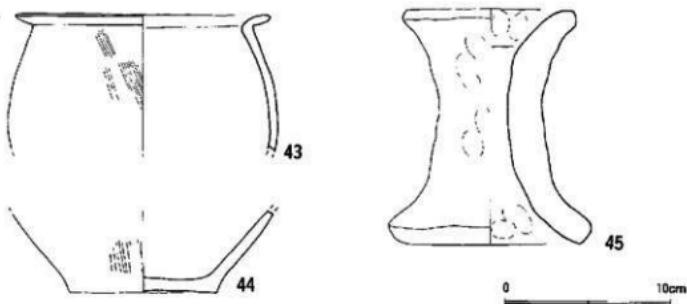


第11図 SK008・010 実測図 (1/20)

調査区南側の谷部落ち際に検出する。平面隅丸長方形を呈し、長軸方位を N-6°-E にとる。長軸 1.2m・短軸 70cm・深さ 10cm を測り、埋土は暗褐色土である。壁は直立し、底面は平坦である。遺物は青磁椀小破片のみである。土坑墓と考えられる。

SK010 (第11図)

調査区中央部で検出する。北半を擾乱により欠失するが、平面隅丸長方形を呈し、長軸方位を N-13°-E にとる。推定長軸 1.2m 程度・短軸 80cm・深さ 20cm を測り、埋土は暗褐色土と黄褐色土の混



第12図 その他の遺物実測図 (1/3)

合土である。壁は直立し、底面は平坦である。土坑の西側にはSD011を検出している。幅15cm・深さ10cmを測る。SK010を囲むように弧を描いている。SK010に伴う施設の一部と考えられる。共に出土遺物はないが、形態より土坑墓と考えられる。時期的に他の埋葬遺構と同時期の遺構であろう。

その他の遺物（第12図 43～45）

その他ピットからも遺物が出土しているが、図示可能な遺物は少数でほとんどが小破片である。いずれも弥生時代に位置づけられる。今回の調査地点内では2次調査で土体を占めた古墳時代後期の土師器・須恵器が殆ど出土しておらず、遺構の分布によるものか、圃場整備の削平によるものか明らかでない。

4. 小結

今回の調査地点は既に圃場整備事業により斜面の削平が大きく行われている地点であり、遺構の残存状態は概ね不良であった。特に2次調査で主体的に検出された古墳時代後期に位置づけられる遺構についてはほとんど認定することが出来なかった。検出遺構は13世紀代の前半を主体とするもので、掘立柱建物・溝・埋葬遺構等で構成される。ただこの遺構群についても削平で消滅しているものが多い存在していると予想される。各遺構は時期的に近接するもので共存してひとつの空間を形づくるものも多いと考えられる。SD002・006はいずれも斜面に平行に掘削され、矩形に巡るものと考えられる。この際北側の掘削ラインがほぼ直線的に揃っており、東側ラインもほぼ平行することから、屋敷地を区画する一連の溝と考えられる。区画された範囲は不明であるが北側については谷が開けているためこれを敷地に取り込むことはないと考えられる。埋葬遺構についてはSK004・005・010は区画内に掘削され、位置的にもまとまり方位を揃えているので敷地内の埋葬遺構の可能性が考えられる。掘立柱建物はこれを構成するピットが他のものと異なり、掘削深が深く柱間も建物としては広いものである。溝との方位がSB009は特に異なるが、門等の施設の可能性はないであろうか。

以上は推測によるものが非常に大きく、区画内の掘立柱建物についてもピットが消滅しており全く明らかではない。少なくとも13世紀代にこの丘陵上に一定規模の屋敷地が構成されていた可能性が高い事が判明しており、今後周辺の調査により関連遺構の確認も行われるであろう。



写真2 調査区全景（東から）

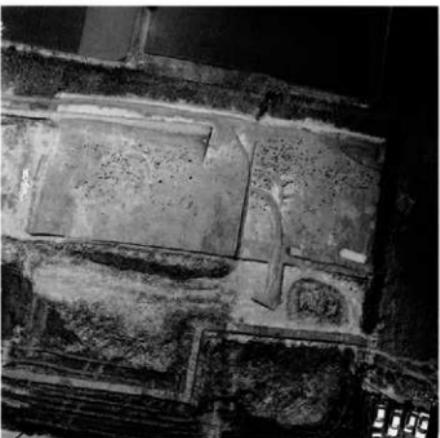


写真3 調査区全景（真上から）



写真4 調査区東半部分（西から）



写真5 調査区西半部分（真上から）



写真6 SK001（南から）



写真7 SK001（東から）

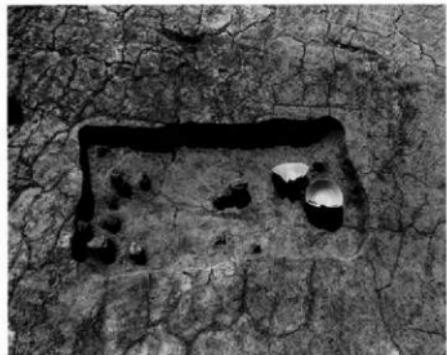


写真8 SK004（東から）



写真9 SK004（南から）



写真10 SK005（東から）

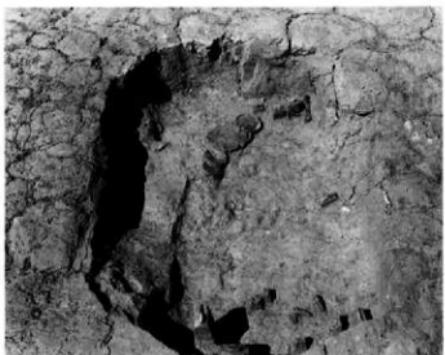


写真11 SK005（南から）



写真12 SK008 (東から)



写真13 SK010 (西から)



写真14 SK010・SD011 (南から)



写真15 SD002 土層



写真16 SB007 (南から)



写真17 SB009 (南東から)

蒲田部木原遺跡群 6

-蒲田部木原遺跡群第6次調査報告-

1999年（平成11年）2月16日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 祥文社印刷株式会社

福岡市博多区博多駅南4丁目15番17号
